

報 告

「学力」を超える NIE

— 東京都北区立滝野川小学校 NIE シンポジウム 2015 の記録 —

キーワード：NIE、滝野川小学校、学力、教材開発、問題解決学習

所澤 潤 東京未来大学こども心理学部

関口修司 一般社団法人日本新聞協会NIEコーディネーター

濱吉正純 前朝日新聞社NIE事務局長

吉成勝好 新聞教育支援センター代表

解 説

所澤 潤

本稿は、東京都北区立滝野川小学校が同校のNIE実践の成果を発表するために、2015年（平成27年）12月4日（金）15：15-16：50に北区滝野川会館大ホールで実施したシンポジウムの記録である。このシンポジウムはNIEの普及啓発の色彩が強いものであるが、学力の向上という、近年話題となっているNIEの特性を中心的話題とし、同校の2年以上に及ぶ実践に基づいて議論を進めていることから、研究物として公表する価値があると、筆者は考えている。シンポジウムでは児童を4名登壇させるという新機軸も打ち出しているが、本解説では、シンポジウムの中心的話題であった学力の問題に焦点を当てて解説することにした。

当日はNIE関係者、保護者、地域に、NIE授業の学校公開を行い、シンポジウムは、それに引き続いて実施されたものである。聴衆は約400名であった。

滝野川小学校は、2014年度、15年度の2年間にわたって、北区教育委員会研究協力校となり、研究主題を「自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成-NIEの日常化と教材開発を通して-」とし、同時に両年度、日本新聞教育文化財団によるNIE実践指定校となり、全校を挙げてNIE実践に取り組んだ。

シンポジウムはその成果を公開するために実施された研究発表会の一部で、題目は「「学力」を超えるNIE～NIEは、いらぬか？子供は、どう考えるか？～」であった。

パネリストは、日本新聞協会NIE専門部会長（朝日新聞社）の濱吉正純、日本新聞協会NIEコーディネーターの吉成勝好を招き、滝野川小学校校長の関口修司の3人で構成し、司会とコーディネーターを所澤潤（筆者）が担当した。また、壇上には同校の4人の児童が加わった。

本シンポジウムで「学力」を取り上げている背景には、現在の教育行政の動向がある。同校が「学力」をNIEと結びつけている考え方の基本は、2014年度及び2015年度の両年に発行した2冊の『研究紀要』⁽¹⁾に示されている。

両冊子では、2013年11月20日の中央教育審議会への諮問「初等中等教育における教育課程の基準等の在り方」に言及し、その趣旨は次のようなものだとしている。

- ① 「何を教えるか」という知識の質・量の改善
- ② 「どのように学ぶか」という学びの質や深まりの重視
- ③ 学びの成果として「どのような力が身についたか」の重視

同校のNIEは、②の実践方法としてNIEを選び、

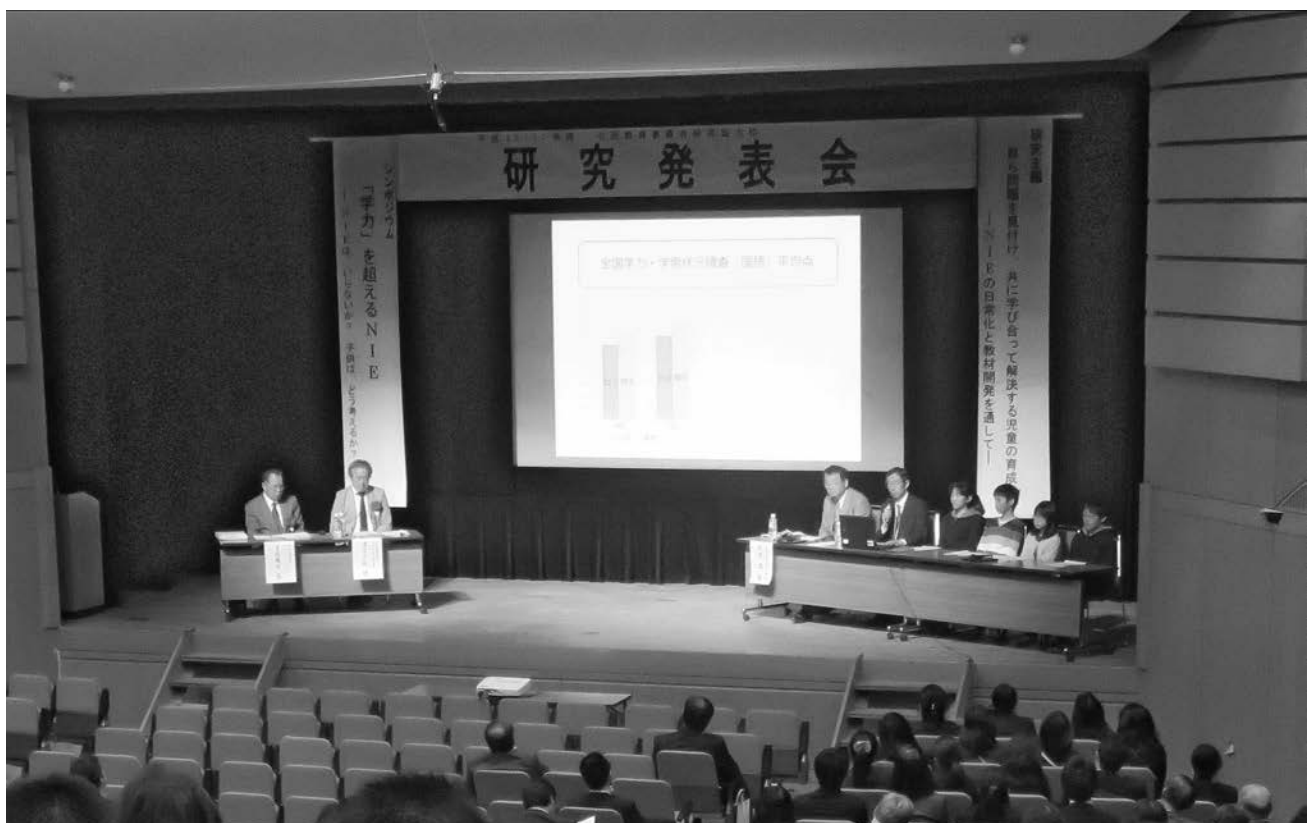
学力の向上を③に当てはめているということが出来る。②については、中央教育審議会での審議以来アクティブラーニング（ある事柄を知っているのみならず、実社会や実生活の中で知識・技能を活用しながら、自ら課題を発見し、主体的・協働的に探究し、成果等を表現していけるよう、学びの質や深まりを重視する）という学習方法に注目が集まっていることを受けて、同校でアクティブラーニングの具体的な方法として特にNIEを選んだといえる。

2015年度の紀要では、NIEという方法を具体的に次の6点としたことが書かれている。

- 1) NIEを通して「問題解決型の学習」に取り組む
- 2) 問題解決型の学習過程に子供相互の「学び合い」を位置づける
- 3) 子供が常に新聞に触れ新聞に学ぶ環境をつくり「NIEの日常化」を図る。
- 4) NIEの新たな可能性を探る「教材開発」に挑戦する。
- 5) NIEの授業実践を検討し蓄積することで、「NIEのカリキュラム化」を実現する。
- 6) NIEの効果検証をする。

その中では、学力向上に直結するものとして、「問題解決型の学習」、「学び合い」、「NIEの日常化」及び「教材開発」の4点があがっているわけだが、それに対して、5)は学校単位のNIEを途絶えさせず恒常化させるためのものであり、6)はNIEの評価を行おうという部分である。

同校の取り組みのうち3)の「日常化」は、学力の向上に大きく寄与していたと思われる部分であるが、表現が誤解される可能性もあるので、補足的な説明を加えておきたい。その意味は、子供たちが新聞に日常的に接するようにする、ということであって、あらゆる授業でいつも新聞を使うという意味ではない。滝野川小学校では例えば、多くの掲示物を新聞形式にするなどの方法を取っているが、その代表的なものは朝の15分の帯時間に週に1回程度、子供たちが新聞に接する時間を設けるという方法であった。その時間帯を「NIEタイム」と呼んでいる。NIEタイムは、関口氏が北区立王子第三小学校で校長であったときに全国で初めて実践し、以来、全国的に普及しつつあるが、滝野川小学校ではそれを「日常化」の具体的な場として位置づけている。



本シンポジウムでは、テストで測る「学力」に止まらない、より普遍性のある学力がNIEによって身につけているということが主張されている。関口氏の示す効果検証は、学力テストの結果から、厳密な分析を経て、「学力」の向上が導き出され、結論されるというものではなく、学力の向上という同校の実践に対する直感的な印象が、テスト結果による「学力」向上の数値によって裏付けられたという性格のものである。

本シンポジウムは、いわば学力を向上させるNIEの機能に注目し、活用せよ、という提案である。NIEの活動は、次のような学習プロセスを生み出すもので、それらは、その括弧の付かない学力を向上させるものだという話題が展開されている。

- ・出来事、物事を時々刻々と変わる最新情報と、学校での学習内容を結びつけて考える。
- ・文章執筆者の意図を推測しながら文章を読み解く
- ・一連の出来事について、結果が判明していない状態で、結果を推測する。
- ・文章を書くに当たって、文章の内容を、自身による取材に基づいたものとする。
- ・文章から、主題となっている問題を発見し、問題をつかむ。
- ・社会的事象を考えるに当たって、リアリティのある情報を根拠とする。
- ・一人一人が、豊富な情報を基盤にして個性的に学びを構築していく

授業とは、教師が教えることでも伝達することでもなく、教師が支援することであり、伴走することであり、支えることである、と言われている⁽²⁾。コンピュータの用語を借りれば、コンテンツをコピーして子供の頭の中のメモリーに貼り付けるのではなく、オリジナルなコンテンツをメモリーのなかに自ら作り出すようにする、と言い換えてもよいかもしれない。

以上に挙げた7点は、授業のそうした基本的な部分によく合うものであることは明かである。学力低

下、PISA型学力が話題になる昨今、都内では多くの地域で学力向上に向けた取り組みがなされているが、一部の区では学力テスト対策として対策用のドリル、さらには過去問の練習などが行われている。同校のNIE実践は、そうした現在流布している方法に代わるものとしての提案だといえる。

本シンポジウムでは、もう一つの焦点としてNIE実践の継続という問題がある。それは、NIEの徹底した推進校であり、全国の注目を集めていた2校のNIEの実践が、蓄積されず、校長の交代とともに消え去ったという事態があったからである。2008年度と2009年度の東京都北区立王子第三小学校（以下、王三小）、及び2009年度から2011年度にかけての群馬県板倉町立北小学校の両校が、全校を挙げて取り組む体制を作りながら、校長、あるいは教育長の交代に伴って消滅するという事態に至っている。前者の校長はシンポジウムのパネリストの関口修司氏であった。パネリストの吉成氏はこの点を憂え、滝野川小学校の行く末を案じて、シンポジウムの最後で、北区教育委員会に実践の継続をアピールしている。

滝野川小学校のNIE実践には、パネリストの吉成氏が、2014年度、2015年度の両年度、同校のNIEのアドバイザーとして、また筆者も2015年度に教育方法のアドバイザーとして協力した。

筆者が司会を務めたNIEシンポジウムは、これが4回目である。3回目まではすでに文字化して公開している⁽³⁾。

本記録の文字化は、東京未来大学非常勤講師の佐藤久恵が行い、内容は関口、吉成、濱吉、所澤、佐藤の5名で確認した。

なお、本シンポジウムの概要は、『新聞通信』9332号(新聞通信社、2006年1月21日発行、pp.2-3)に掲載されており、文字化にあたって参考にした。

シンポジウム

「学力」を超えるNIE ～NIEは、いらぬか？ 子供は、どう考えるか？～

司会・コーディネーター	東京未来大学こども心理学部教授	所澤 潤
シンポジスト	日本新聞協会NIE専門部会長（朝日新聞社）	濱吉 正純
	日本新聞協会NIEコーディネーター	吉成 勝好
	東京都北区立滝野川小学校校長	関口 修司
	同 校 6年児童	宮崎 晴子
		伊藤 庵
		石田 彩華
		畑尻 聡悟

総合司会（蓮見和代 北区立滝野川小学校副校長）
これよりシンポジウムを行います。準備を致しますので、少々お待ち下さい。

（準備）

司会（所澤潤 東京未来大学こども心理学部教授）
それでは、これから、シンポジウムを始めます。テーマ「学力」を超えるNIE～NIEはいらぬか、子供はどう考えるか～」です。それでは最初に登壇者の紹介をします。僭越ながら私から紹介させていただきます。司会を務めます所澤と申します。東京未来大学で勤めております。私の専門は教育方法学です。NIEについて、今年の4月からですね、NIEだけでなく、授業の研修について、こちらの学校のアドバイザーを務めさせていただいております。また、滝野川小学校の学校評議員も務めております。どうぞ、よろしくお願い致します。

吉成勝好（一般社団法人日本新聞協会NIEコーディネーター） 吉成と申します。先ほどご紹介がありましたように、一般社団法人日本新聞協会というところで、NIEコーディネーターという仕事をしております。もともとは小学校の教師です。新聞協会は、新聞社と通信社と放送局と合わせて130社が加盟している業界団体です。この日本新聞協会によってNIEが提唱されたのが、ちょうど30年前の1985年、—それから30年経っていますが、その30年前のいちばん初期からNIEの授業や普及のための運動をしてきたものですから、そのご縁で教育界と新聞界をつなぎNIE

の推進をはかる仕事をさせていただいております。

関口先生とは、私、これは30年以上前になりますが、文京区の誠之小学校で校長をしておられた岩上校長先生（故人）に招かれて、新聞活用の研修会に行ったのです。そのときに、若手の教師でいちばん鋭い質問をしたのが、関口さんで、それ以来のおつきあいです。滝野川小学校でもこの3年間、いろんな授業を見せていただいたり、研究会に参加させていただいたりして、私も一緒に勉強してまいりました。よろしくお願ひ致します。

濱吉正純（朝日新聞社NIE事務局長） 朝日新聞の濱吉と申します。NIEの専門部会の部会長として、今日は参加させていただきました。私は、20年、新聞記者をやりまして、そのあと、宣伝部長を5年、それから、朝日ホールの総支配人を5年半、務めました。同じ新聞社の中で、3回ほど転職したような珍しい異動経験があります。そして、2年前の12月からNIEの事務局長として仕事をしております。今日はどうぞよろしくお願い致します。

関口修司（北区立滝野川小学校校長） 本校校長の関口と申します。今日はありがとうございます。私、今、吉成先生からもご紹介ありましたけれども、教員の若い頃からNIEをやっておりました。そのときに、どちらかという歯がゆく思っていました。それは、多分、それぞれNIEをやっている方も同じように、思っているかもしれませんけれども「子供たちをそれなりに育てたな」という実感を持っていました。

自分でいうのも何ですけど、そうやって育てた子供たちが、学年が変わって、クラスが変わったり、次の中学校に行ったりするうちに、いつの間にか、ふつうの子になってしまう。こういう言い方、失礼かもしれませんが、そのときに思ったのは、「一人では限界がある。校長になったら、学校を挙げて組織でNIEをやりたい」、そういうふうに思いました。

1年生から6年生まで、それぞれのクラスで、NIEをやれたら、きっと子供たちが育つだろう。そんな思いがあって、今日の発表になったわけです。私が言うよりは、もう皆さんそれぞれの学級の子供たちの様子、先生方の様子をご覧になっていただいたので、分かっているんじゃないかと思いますが、あとは、ここにいる子供たちがこのあと何を言うか、ドキドキしています。是非、楽しみにして下さい。

子供たち順番にクラスと名前を言ってもらいます。座ったままでお許し下さい。

宮崎晴子 6年3組ミヤザキハルコです。

伊藤 庵 6年1組イトウイオリです。

石田彩華 6年1組イシダアヤカです。

畑尻聡悟 6年2組ハタジリソウゴです。

所澤 4人の皆さん、どうぞ、よろしくお願ひ致します。それではですね、シンポジウムの趣旨を説明させていただきます。座ったままで失礼致します。

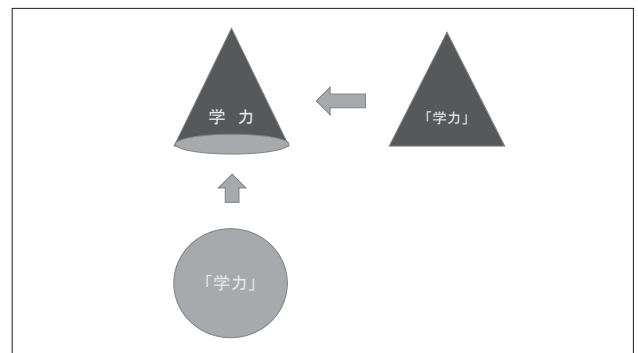
まず、先ほどから関口先生、「30年間」というお話が出ていますが、北区でも王子第三小学校、そして東十条小学校、そして滝野川小学校とNIEを、学校を挙げて取り組むという形でNIEの実践校として、いろいろな成果を上げてきていらっしゃいます。その中で関口先生がやっぱりこれだけは言いたいということが「学力」という問題、他にも言いたいこといろいろとあると思いますが、ここでは、まず「学力」の問題を取り上げたい。

「NIEは、いらぬか？子供はどう考えるか」これは、やっぱりあちらこちらでNIE — なんて新聞なのかというようなことを言われることがあるわけですが、そこで、それに対して、成果で答えようという気持ちがあります。

ここで、シンポジウムの内容としてですね、テー

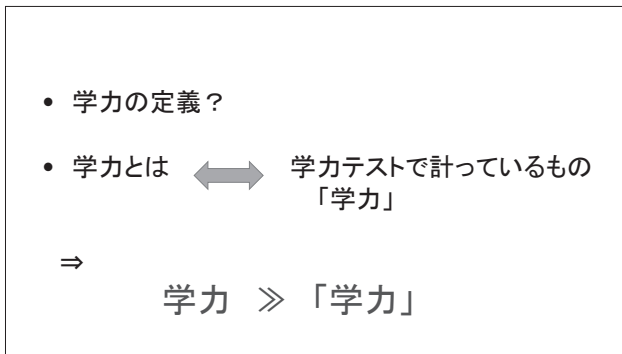
マとして「学力」と書いたのですが、実は、ここに「」(括弧)をつけてあります。括弧をつけてあるのはどういう意味かということについて、ちょっと簡単に説明をしたいと思います。

ここに非常に大雑把な図を書いたのですが、左側の上のところに書いてある円錐が学力です。括弧をつけた「学力」が右側の三角形と下の方の○(丸)になっています。学力テストというのは、右側から見たり、下から見たりと、そのようなものなのですね。つまり、実際の学力というのは、これだけでは表せない。単なるペーパーテストだとか、入学試験だとか、そういうものでは表せないような学力というのがあるという考え方です。



しかもですね、この学力、円錐を描いてありますが、この円錐の中はもしかしたら、空洞かもしれないですね。そうではなくて、中身がいっぱいある円錐。そういう学力のイメージを考えています。学力の定義ということは、非常に難しいというか、定義ができないのだと思うのですが、そのため学力とは、結局、学力テストで測っているものというふうなことになることが多い。「この学校の子供、学力があるね」と言えば、それはペーパーテストで測った学力であって実は円錐の中身にある学力ではないという問題があります。そこで、その学力テストなど、わかりやすい手段で測っているものを括弧付きの「学力」と言っています。

しかし、ここで、括弧付きの「学力」ではない学力というのは、このスライドにこういう、不等号が二つ並んでいるのが書いてありますが、これは、そういうテストで計れるものよりは、遙かに大きな学力、遙かに内容のある学力というような意味で描いてお



きました。これは、どれだけ努力しても絶対に測れるものではないと思いますが、しかし、人間がですね — 多分、先生方が見たときには直感的にペーパーテストが悪くてもこの子は学力があると、点数が同じでもこちらの子の方が学力が遙かに高い、そんなようなことを感じるということもある。そういう意味での、この括弧のつかない学力をどうやって作り出すかということがNIEの一つの役割のように思えるわけです。

今日は、そういうようなことで、括弧つきの「学力」を超えるNIEということを行っています。子供はどんなことを考えるかというのが副題だということで、まずは、NIEを経験している4人のお子さんたち、子供たちに感想を聞いてみたいと思います。

宮崎 新聞はわからない漢字や言葉があって、読むのが難しいけれど、今は友達に聞いたりして読んでいます。

伊藤 テレビが伝えてくれるけれど、新聞は読んでいかないと情報が手に入られないものだと思います。今では、家の人から聞いたり、テレビのニュースを見たり、伝えてくれるのを待っていたけれど、僕にとっていちばん身近な情報を得る手段だと思います。

関口 だいぶ、固いですね。もっとね、いつものようにやっごらん、はい。

(会場 笑い)

石田 私はインターネットは便利で使うときもよくありますが、新聞はインターネットよりも情報が確かなので、情報を知るいちばんの手段だと思っています。新聞はときどきどこを読んでいいかわからなくなるときがありますが、詳しく知ることができていいと思

ます。

田尻 世の中の出来事を知ることができるので、新聞を読むことはいいことだと思います。僕にとって新聞は世の中のことを、テレビよりも詳しく教えてくれる大切な情報源です。

所澤 まず、4人のお子さんたちのお話を聞きましたけれども、ここで、NIEの普及で全国をまわって指導をされている吉成さんにNIEの状況、そして、お子さんたちの今のお話について伺いたいと思います。

吉成 先ほどからNIEが提唱されて30年と言いましたけれども、今の子供たちの発言を聞いて、ここまで来たのかなと思って、感慨深いものがありました。NIEは、アメリカで1930年代から始まったとも1950年代からとも言われていますけれども、日本の場合は明治時代から、新聞を教育に使う動きがあって、文部省の国定教科書なんかにも取り上げられていました。特に戦後は、日本の教育民主化の希望的な存在の一つとして、新聞をつくったり、新聞を読んだりする活動が推奨されていました。その後、学習指導要領の改定の度に比重は下がってはきたのですが、とにかく連綿と続いてきました。その伝統的な日本の新聞教育と、今のNIEとは大きな違いがあります。

まず第一に、今までは新聞が大好きな先生というか、いわば先進的で実験的な志ある一部の教師が新聞を熱心に取り上げてきました。ま、ちょっと変わった先生が好きでやっていると見られたところもありましたが、今のNIEは教員界と新聞界が連携し、教育全体を視野において、教育改革運動として取り組んでいる運動です。始まった頃は、新聞界と教育界というのは水と油みたいな関係で、何か事件があると新聞社がどっと学校現場に来て、土足で上がってくる、教育的な配慮が全然ないと言われていましたし、新聞社側からは、学校の常識は世の非常識、閉鎖的で独善的なところだと見られていました。そんな状況の中で始まったことですが、ともに、日本の教育はこれではいけない、なんとか変えようという共通認識があったと思います。それと同時に私

は、これは教育改革運動であると同時に、新聞改革運動でもあったと考えました。事実、この30年間で日本の新聞は大きく変わったと思います。ずいぶん読者の方に目が向くようになりましたし、児童生徒も読者として認知するようになりました。教育に貢献しよう、教育に役立つ新聞にしようという意識も強まってきたのではないのでしょうか。

第二に、今までの新聞活用というのは、教師が自分の教育意図に基づいて、自分の教えたいことに合致した記事を選んで、切り抜いてコピーして子供たちに与えるという形が一般的でした。しかし、NIEの目指しているのは、そこから脱却して — 今日の授業なんかもそうだと思いますが、子供たち自身が、与えられた教材ではなく、自ら学ぶ学習材として使う。今までだったら教育的に見てちょっと見せたくないような記事も含めて「丸ごと」使う、子供自身が主体的に選んで学んでいくことを大切にするというところが大きな違いです。さらに、新聞を「読み比べる」ことを重視することも大きな違いですね。いろいろな新聞を読むことによって、世の中にはいろいろな意見があるということを知る。これらは「日本のNIE」と呼ばれる大きな特徴です。

第三には、日本のNIEは学校、主に小学校中学校から始まったのですが、30年を経て、学校から家庭、地域へと広がってきた。公民館とか老人クラブとか、それから、企業でNIB（ニュースペーパー・イン・ビジネス）と言ったり、NIL（ニュースペーパー・イン・ライフ）「人生に新聞を」と言ったり、縦にも横にも広がりが出てきています。

特に、今日の発表の研究課題のところに「家庭、親子で新聞を読むというようなことに今後も力を入れたい」もありましたように、「家庭と連携したNIE」という機運が出てきているのも嬉しいことです。

最近の動きとして特に注目したいのは、教員委員会・教育行政と学校現場と新聞界が連携協力して、この運動を推進しようというところが増えてきたことがあります。北区はそのモデルと言えるところだと思います。区の教育委員会は「新聞大好きプロジェクト」という施策を打ち出していて、幼稚園、小学校、

中学校と一貫したNIEを推進しようとしています。在京六紙 — 東京で発行している朝日、毎日、読売、産経、日本経済、東京の各新聞社は、全面的に支援していますし、特に北区の場合は、北区新聞販売同業者組合が強力なサポートをしてくれています。NIE推進のトップを走っているのは北区であると言えるでしょう。

もう一つ強調したいのは、先ほども関口校長からありましたように、学校組織して取り組むことの必要性とか有効性が自覚されていることです。少数の優れた実践者だけが、先進的なことをやるのではなく、どの教師も普通に当たり前に日常的に新聞を使っていくようにしていこうということです。学校の教育課程とか生活時程とかの中に位置づけたり、NIEタイムを定期的に行ったり、環境整備として情報コーナーとかNIEコーナーみたいなものを作って、校内で子供たちが日常的に新聞を目にする、自由に読めるようにする。校務分掌の中にNIE担当とか、NIE主任というのを位置づけている学校も出て来ています。その面でも、滝野川小学校の実践は全国の先進的な取り組みとしてモデルになるところではないかなと思っています。



さらに、教科化される道徳ですね。 — 道徳にも教科書ができるということで、今までNIEで新聞を使っていたところが、教科書を使わなければいけないということになったらどうなのか、道徳の学習とNIEをどう結びつけるかということも、一つの課題になっていくでしょう。

そんなところが全国の状況です。

所澤 吉成さんのところから、NIEの現状、それから、教育界からの期待とか、あるいは、もう大規模に行っているという話が出て来たのですが、ここで、新聞社を代表している濱吉さんに伺いたいと思うのですが、実は、そんなに大規模にNIEが展開されたときに、新聞社がそれに対応できるのかと、ちょっと今の吉成さんの話を聞いて不安を感じてきたところです。その点も含めて、今日のNIEの発表 — 素朴に感じた点から含めてお話をいただければありがたい。

濱吉 いろんなですね、授業がありまして、もちろん、全部見られたわけではないのですけれども、例えば、4コマ漫画の最後の一コマを隠して子供たちに考えさせたり、それから、概数を教えたりする授業は興味深かったです。概数の授業では、ラグビーのワールドカップの日本代表が南アフリカに勝った大金星のビデオを見せていました。仕事を忘れて見入ってしまったのですけれども、記事に出ている観客数、例えば「29,029」という数字を、「3万」と簡素化してわかりやすく表現するか、そういった観点から捉えている授業がありました。なかなかおもしろいなと。まず、ビデオスポーツを見せて、子供たちの関心をひいてから、数字の取り扱いについて教える、なかなかいいなと思いました。



他にもいい授業があったのですけれども、何よりも久しぶりに滝野川小学校に来まして、びっくりしたのは、各教室に学習新聞というのでしょうか。「エコ新聞」とか、「環境新聞」、それから「新聞社の印刷所を見学したときの新聞」。これがほぼ、全部のクラスにはってある。そうしてその中身が非常に出来



がいい。みなさん字もきれいだし。たいへん驚かされました。これも、関口先生 — 別にヨイショをするつもりはないのですけれども、日頃のご努力の賜だと思いました。

学校側へのお願いということ言えば、最近の教科書というのは以前に比べて、新聞の記事を取り扱う、そういった内容が多くなっている気がします。新聞業界としては、今年からはじめて、教科書業界の方々と非常に連絡を取り合って、今後どういうふうに新聞を取り扱っていただくと、いただくかという、そういったコミュニケーションをはかっております。しかしながら、いったん教科書ができてしまうと、同じものを何年も使いますので、中に出ている記事は当然古くなりますよね。ですから、学校の先生の皆さんは、授業で新聞のことが出て来ましたら、古い記事ではなくて、それに関連づけて新しい記事をどこかから引っばってきて、できるだけ新しいものを使って授業をしていただければありがたいと思います。

皆さんが読んでいる新聞ですが、朝刊も夕刊も各新聞社一種類しか作っていない、— そう思っている方が意外と多いのではないのでしょうか、私はそんな気がします。例えば、朝刊で言えば、1日に4種類から5種類、新聞をつくっております。夕刊でいうと、2、3種類を印刷していますけれども、全国紙では夕刊の配られていない地域の方が実は圧倒的に多いのです。みなさん、ご存知でしたか？ 東京で言うと、首都圏とそれから、北関東 — 静岡も含めまして、それだけなのです。あとは、夕刊が行っ

てないのです。それはどうするかというと、夕刊に載った記事の中で特に大事なものを、夕刊の届かない地域の朝刊の中に盛り込むことになります。ですから、短くしたり簡素化したりしてわかりやすくして、掲載していきます。

当然、遠くの地域に配るものは、切時間が早いですよね。ここにいるみなさんの中に地方で育った方で、かつて全国紙をもしご覧になった経験があるとしたら、そうですね、20年くらい前まではナイターの記録 — プロ野球のナイターの記録が途中で切れている、要するに結果が出ていない新聞を目にしたことがけっこうあったと思います。今ではそういうこと、なくなりましたけれども。例えば東京で読む新聞、朝刊と、新潟とか、青森で読む新聞は実は、3割くらい中味が違います。そういったことを、わかっていただきたいなと思います。

そして、新聞というのは、1日の制作過程の中で時間によって、刻々中味が変わっていきます。切時間が来れば、もう、そのときにある材料でつくらなければいけない。次の新しい版には新しい情報を蓄積していく、そんなような繰り返しなんです。新聞は当然最終版が出たあとというのは直せません。インターネットやテレビはすぐ、修正をしたり追加の情報を流したりできますけれども、新聞というのは一回印刷したらそれには何も載せられませんよね。でも、その過程では、もう刻々と形を変えている生ものである — そういった感覚を持っていたきたいなと私は思います。

例えば、海外でのオリンピック、それから、サッカーなどの試合で、夜中に結果がでるものけっこうありますよね。そうしますと、早い版と最終版で全く中味が違う、そういった新聞も実は手に入ります。各新聞社のNIE担当者に言えば、早い版と最終版、両方を用意してくれますので、どんどん言っていただきたいなと思います。

それから、新聞社としては出前授業、記者が学校に行ってお話をする出前授業、それから、今日と同封されている資料の中に、新聞授業ガイドブックというのがあります。これ、私が1年かけて、真っ

さらから、取材をして書いたものです。こういったものを無料で提供しておりますので、どんどん活用していただければと思います。

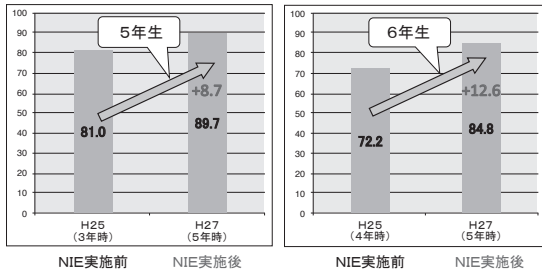
新聞離れが進んで、実は新聞社も非常に危機感を持っています。学校側はNIEにもっと力を入れていただければ、当然新聞社側も考え方を変えてどんどん対応していく、そういった時代が来ているのではないかと私は思います。以上です。

所澤 はい。今のお話です、僕は、吉成さんのおっしゃるように、どんどんNIEが広がっていったら新聞社は困るのではないかと思ったのですが、しかし、今のお話ではもっともっと広げてほしいということです。出前授業を、ここに来ていらっしゃるみなさんが全部各学校から一斉にお願いをして、新聞社を困らせるというぐらいのことができたらいいなというようなことも思います。こんなふうに、新聞社と学校との関係を実は非常によくしてくれたのが、関口先生、関口さんなのですが — と僕は思っているのです。そういった新聞社との繋がりを非常に丁寧にやっていったということもあると思います。そこでですね、北区で行った3校でのNIEの展開を含めて、本校の研究と「学力」ということについて、関口さんの方からちょっとお話をいただければと思います。

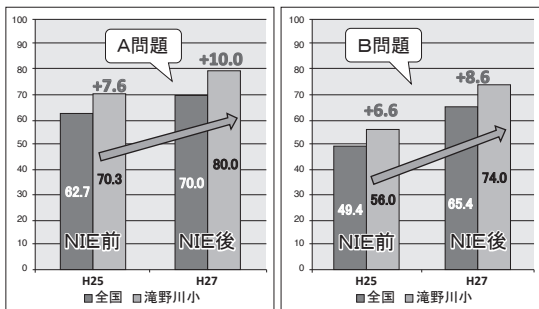
関口 学校でNIEをやると、新聞の購読者数を増やすためにNIEをやっているのではないかというふうに捉える人がいるのが、とっても心外です。私がNIEをやっているのは、新聞が教育に必ず役に立つと、そういう気持ちでやっているのです。もちろん、最終的に新聞を読むような子供たちや家庭が増えてくれれば有り難いことですが、私は、決して、増やそうというような意味では考えていません。新聞をできるだけ活用しようと、新聞社の方には失礼ですが、新聞を利用してしまおうと、そんな気持ちでいます。濱吉さんごめんなさい。

まず、括弧づきの学力のことを、先ほど、発表の中でも出て来ましたが、同じ子供たちが3年から5年になる、または、4年から6年になるというNIEの指導前後で、これだけ伸びているということです。

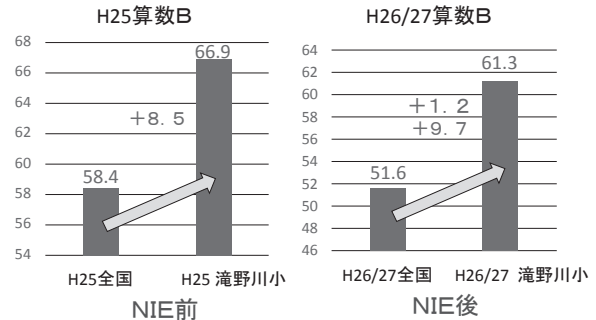
北区基礎基本調査（国語）目標値に対する達成率（滝野川小）



全国学力・学習状況調査（国語）平均点（滝野川小）

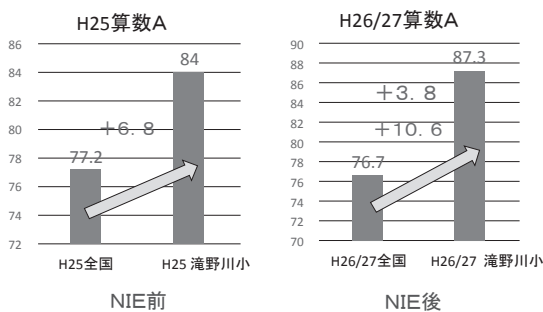


算数B問題の比較（H25とH26・27平均）（滝野川小）



次に、全国学力・学習状況調査です。これは調査対象の子供が違います。年度の異なる6年生で比較をしているわけです。NIEの指導前と指導後の比較で、これも先ほど出て来た結果と同じ問題です。子供は異なりますが、NIEの前後で国語の書く力が伸びた、国語の力が伸びたというふうに分析ができると思います。そこで「国語だけか」ということになってしまうので、算数のA問題、—これはNIEを始める時ですから、要するにまだNIEをやっていない平成25年度の結果と、昨年度と今年度の結果の平均を比べてみました。

算数A問題の比較（H25とH26・27平均）（滝野川小）



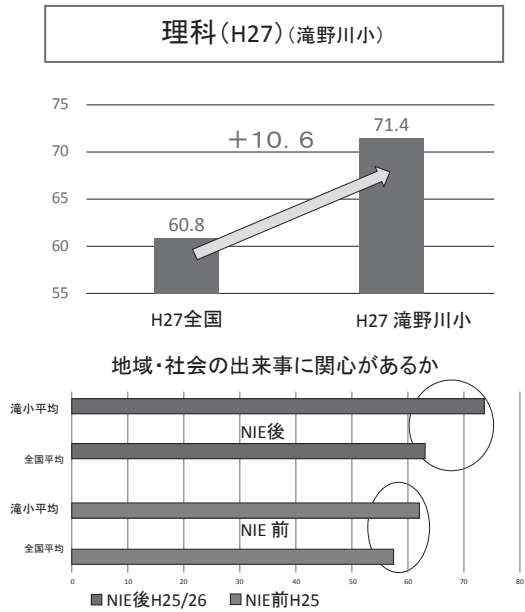
平成25年度結果でも全国平均より随分高いように感じますが、これはNIEをやっていないときです。全国平均が77.2ポイントのところ、本校では

84ポイント。それでもかなり高いですね。問題はNIEをやって、これを超えられるかということですね。NIE指導前の場合で68ポイント高いわけですが、指導前後の結果が、ここにあります。NIEの指導後だと、10.6ポイント。結果として3.8伸びているということになります。算数の少なくとも、A問題に関しては、かなり伸びているということがわかるのではないのでしょうか。

B問題、これは活用の問題です。正直言ってこれは出したくなかったのです。これは、NIEの前するとき、もちろん、本校の子供たち、とても優秀です。8.5ポイント全国を上回っています。NIEをやってから、61.3と下がっているようですが、全国の平均も下がっていますので、そういう意味では9.7ポイント上がりました。僅かですが上がっています。どうやら算数もそれなりに成果が出ているのではないかな、ということと言えるかなと。

理科 — 平成27年度から、今年度から理科が始まりました。本校は私の前任の林（はやし）校長が理科を進めていました。そういう意味では、断言はできませんが、NIEでもそれなりに成果が出せたのかなと思います。11.6ポイント。全国を上回っている。これはうれしい結果だと思っています。ですから、決してNIEは、国語の書く力を伸ばすことだけにどまらないということが言えるのかなと思います。

意識調査はどうかと言いますと、地域社会のごとに関心があるかということについては、はじめと終わりではそれぞれ開きが広がり関心が高くなっています。読書は好きかについては、NIEの前は本校の平均が、読書がきらいなというか、全国平均より



低かったのです。それが今年度、全国平均を上回っています。そういう意味では読書好きの子供も増えていると思います。

これは、原稿用紙2、3枚書くのが苦手かの調査結果です、私など書くのにだいぶ時間がかかりますけれども、NIEで多くの子供たちが、書くのをいやがらなくなってきたというのは、それなりの成果であると思っています。まずは、括弧づきの学力という意味で成長があったのではないかなということをお伝えしたいと思っています。以上です。

所澤 はい。今、校長の立場から学校の実際の成果という形で説明をしていただきましたが、子供た

ちはそれをどう感じているのでしょうか、ここで、やっぱり4人に聞いてみたいと思います。まず、伊藤くんからですね。

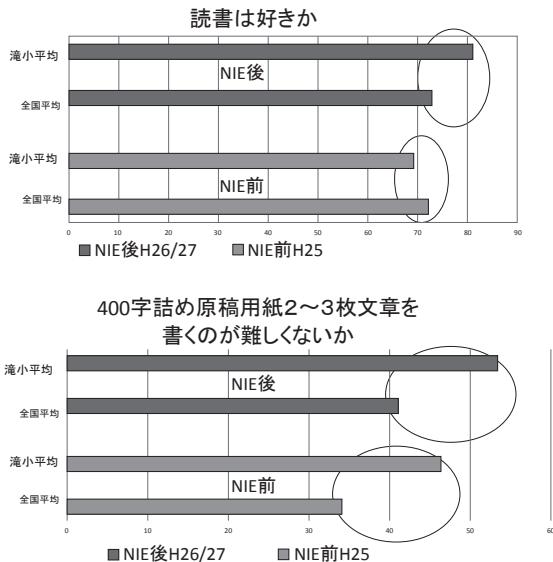
伊藤 今までは自分から知ろうとすることがなく、聞こえてくるニュースだけをなんとなく聞き流していましたが、今は学校で起こったことだけではなく、日本でそれから、世界で起きていることも、知りたくなってきました。そうして、いろいろなことに興味を持つと友だちだけでなく、年上の人や家族や祖父母などとも、たくさんの大人と話ができるようになった気がしてうれしいです。新聞づくりは、はじめは面倒でした。新聞づくりが身近ではなかったからだと思います。でも、授業でやっているうちに、物事に問題意識を持ったり、短い文でまとめたりする力がついた気がします。新聞づくりの大切さが最近になってやっとわかってきました。

宮崎 NIEタイムでは、読む力がつくと思います。新聞には文字がたくさん書いてあるので、読み続けていけば、本を読むのも好きになると思います。実際私も、たくさん字の書いてある本を読むのが好きになってきました。新聞づくりは、私はあまり好きではありません。私は、元々、文章を書くのがきらいなので、先生が新聞づくりを始めますというと、心のなかで「いやだな」と思っていました。でも、書き始めると、書きたいことが頭の中で思い浮かぶようになってきたので、すぐに書くことができるようになりました。

畑尻 NIEタイムをやりはじめた頃から比べると大きな成長を感じます。はじめは文を書くのが苦手で、時間内に終わらすことができませんでした。今は時間内にできるようになりました。また、スクラップする記事も前はスポーツにしか目を向けませんでしたが、今は、最近起こったおもしろいできごとや重要な事件を書くようになりました。新聞づくりでは文章を書くことで、漢字や熟語などを学んだり、事実と意見を分けて書く書き方を学びました。新聞を書くことで作文の力やイラストの使い方、見出しの文字の目立たせ方や記事の内容を一言でまとめる見出しの書き方が身につきました。

H27全国学力・学習状況調査・児童質問紙結果 (滝野川小)

「学ぶ力」の向上



石田 私は、最初、新聞をスクラップするのがいやでした。なぜなら、自分の意見を相手にわかりやすく伝えなければいけないからです。でも今では新聞スクラップをすることは、いいことだと思っています。それはスクラップの要約や意見は文を短くまとめて相手にわかりやすく伝えるのが重要なので、それを続けたことで作文をうまく書けるようになったからです。例えば、今までは夏休みの読書感想文がなかなかすらすら書けなかったのですが、今年は自分の意見をはっきりと書けるようになりました。新聞づくりについてはグループでつくる新聞はいろいろな人の考え方が同じ紙面にあっていいと思います。みんなで作るとチームワークがついてくると思います。個人の新聞だと自分の意見としてみんなに主張できるのがいいと思います。自分の意見を持って伝えるようになることができるようになると思います。

関口 はい、ありがとうございます。実は今、新聞づくりの話が出て来ましたが、コーディネーターの吉成さんは、担任時代、いくつもの賞を新聞づくりで取っていらっしゃいます。ここで、子供たちもいますし、多くの先生方も新聞づくりを実践されている方がい

らっしゃると思いますので、吉成さんに新聞づくりのコツを伝授していただければと思います。よろしくお願い致します。

吉成 今日は、正直びっくりしました。3年前に来て、新聞づくりを先生方と一緒にやったり、子供たちにも話したりしましたが、この3年間の成長はものすごいものですね。本当に感心しました。

新聞制作学習は、新聞活用学習、新聞機能学習と並ぶNIEの三つの分野の一つです。括弧つきの学力でない学力、生きる上で役に立つ学力を身につける上でとても有効だと思います。新聞づくりの活動は、本当の意味での総合学習ですね。いろんな教科で身につけた学力を総動員して、企画をし、取材をし、執筆をし、印刷をして配り、読者の反応を見て、また考えるというふうに、学んだことを総合的に使いながら新しい学びをしていく活動です。

また、今特に強調したいのは、発信者教育としての機能です。現代は一億総発信者時代と言えますね。メールとかブログとかツイッターとかフェイスブックとかラインとか、便利さと共に、いろんな問題が起きています。自分が発信したり受信したりする上で



のルールやモラルやガードを学ぶことが重要ですが、その基礎基本となるものを、NIEで学ぶことも有効だと思います。

今日、皆さんの新聞づくりを見させていただいて、とても素晴らしいと思ったのですが、こうすればもっとよくなると考えたことも幾つかあります。中でも一番私が強調したいのは、「取材」ということです。「取材」— 実際に現場に行って、自分の目で見て、耳で聞いて、手で触れて、肌で感じたことを表現するということですね。

私は、NIEで全国を回っていますけれども、多くの学校で壁に貼られている新聞を見てみますと、社会科のまとめ新聞など特にそうなのですが、インターネットから引っぱってきたり、本や図鑑やパンフレットから借りてきた情報が多い、それで「楽しかった、面白かった」で終わってしまう。これでは本当の力はつきませんね。滝野川小の新聞づくりは、この取材ということをととても大事にしていますが、さらに追究してもらいたいと思います。

これ（写真）、先日の『東京新聞』ですが、「滝小アドベンチャーマップ」っていう記事が載っています。大好評だったそうです。6年生が実際に現場に行って取材して書いています。だから、とても生き生きしているんですね。例えば、畑尻くんは、飛鳥山公園で取材していますね。とてもいいと思いました。

それから、もう一つ、滝小の新聞でこうすればもっとよくなると思うのが、「見出し」です。普通の新聞はもちろんです、子供の新聞でも新聞記事が生きるかどうかは、見出しが大きな役割を果たします。新聞の見出しは「題」とか「テーマ」とかではない、最も重要な記事のエキスのことです。「そうなのか」とか、「あ、えっ、なんだろう?」とか、「読んでみたいな」「へええ」と思わせるような見出しをつけることです。

これは滝小の学校新聞ですけども（画像省略）、初めのころは、「展覧会があった」とか、「運動会ががんばった」とか「遠足にいったよ」とか、行事名をそのまま書いている見出しが多かったのが、最近は、

ただ「展覧会」と書かずに、「みんなで協力」と強調して書いています。それから、「広がる思い、響き合う心」という見出しとか、見出しらしくなっています。そこをさらに練っていくとよいと思います。

ついでに、せっかくですから、6年生の学級新聞も見てみましょう。3クラスありますが、それぞれ違って個性があるところがいいですね。1組は、大きい判の学級新聞を班ごとに出しています。2組の新聞名は、6の2だから「ムニムニ新聞」「ムニムニタイムス」です。楽しいです。「6年生このままでいいのか」という見出しも内容もいいですね。3組は個人新聞ですが、ここはまた、おもしろくて、全員が自分だけの新聞名を持っています。「クリモア新聞」って、そこにいる宮崎さんですけども、中身がとても楽しいです。「取材」と「見出し」に注意を向けると、さらによくなると思います。

滝小の新聞づくりのさらにすごいところは、4組、特別支援学級ですね。特支学級であれだけの新聞を継続的に出しているところは、全国的に見てもとても珍しく、貴重だと思います。取材活動がよくできているし、内容もいい。何よりも、子供たち自身が全校に配達していて、新聞を通して全校の子供たちや職員と交流しているのが、素晴らしい取り組みだと思いました。

所澤 今、吉成さんから取材のことについて、その他のことについてもいろいろお話があったのですが、取材というんですね、滝野川のようにNIEに力を入れている学校は、当たり前のことのように思っていると思うのですが、実際は、これは学校の先生にとっては、けっこう難しいことかもしれないという感じがします。というのは、私が小学生だったのは、1960年くらいなのですが、学級で新聞をつくるような場合だとか、校内放送でニュースなんていう場合、少年雑誌に載っている世界のニュースとかそういうものを写したり、朗読したりするだけなんです。だから、取材というのはなかったわけです。学校教育の中で取材ということが、— もとから必要だと思いますが、ちゃんと教育の中に入ってくるというのは、そんなに古いことではないように思うのですが。と

いうことは、学校の先生方が、必ずしも取材ということに得意ではないことがあると思います。そこで、やはり、ここは新聞社のプロの目として、取材のお話をちょっとしていただけるとありがたいなど。

濱吉 はい、私は出来のいい記者ではなかったのですが、あまり大層なことは申し上げられないのですけれども、取材で一番、基本的なことは、人の話をちゃんと聞くということです。それから、その中で何が大事で必要か、やはり、常に考えてなければならぬということなのです。

それには、下調べもあります。人の話を聞いて、心に当たる部分、それを書いていくのですけれども、その書き方が新聞はちょっと独特ですよ。逆三角形とよく言うじゃないですか。大事なことから、先に書くと。なんで、大事なことから書くのか。— コラムなんかは別です。コラムは起承転結で読ませるからです。一般の記事は、大事なことから書かないといけません。— 実は、先ほど申し上げた新聞は生ものだと、一日の中でどんどん新しい記事が入ってきます。そうすると、優劣をつけられたり、他の記事が大きな扱いになれば、その記事は小さな扱いになったりする。そうして、どんどんどんどん削ったり、形を変えたりして、なんとか、紙面に収めていく、そのときに、記事の後ろの方から削るわけです。

新聞社には、必ず、整理部、見出しをつけたり、人が書いた、記者が書いた記事に対して見出しをつけたり、価値判断をして、レイアウトを決める部署があります。その整理部の記者たちも新聞記者です。新聞記者の経験者がやっています。その人たちがパッと見て、瞬時に判断するわけです。これ、こちらの記事の方が大きい。とすると、こっちを小さくする。後ろから削っていく。全部読んでいって真ん中から削ったりするのは、非常に時間がかかりますよね。ですから、後ろから削って、場合によったら、段落ごと、削ることもあるのです。ですから、段落ごと削ってしまって、その部分から見出しを取っていて、あとで、慌てて刷り直したなんていうミスが出ることもあります。

この整理部の記者は、センスとスピードが要求さ

れます。それから、毎日新聞を読み込んでないと、瞬時に判断できない。私は30歳の後半に2年間だけ、整理部の記者をやったことがあるのですが、センスもスピードもなかったもので、たいへん苦労しました。なぜかという、メ切ギリギリまで原稿がこないことが多いのです、そうすると、真っ白なんですよ、紙面が。焦りますよね。もう胃が痛いですし、それから、髪の毛がわーっと立つような緊張感があるんです。今、薄くて白くなったのは、そのときの労災じゃないかと思うくらいなのですけれども、とにかく、そのくらい緊張します。ものすごいストレスです。

一つ、版が終わったら「はあーっ」とひと息ついて、その場で御飯を食べて、次の版の仕事にとりかかる。もう、その連続です。整理部の記者は基本的に一人で1頁担当しますので、夕方頃会社に出て来て、朝の3時頃まで働いて、かなりたいへんですよ。そこで、何回も失敗したり、もうデスクにしょっちゅう怒られたりしたので、それが結構トラウマになってまして、整理部を離れたあとも、夜中に何度もうなされて、原稿が来ない夢、「紙面が埋まらない、どうしよう」。そういった苦い思い出があります。

これ、どんな優秀な記者も同じような夢を見ています。そういったことを経験しますと、人がちゃんと見出しをつけられるような記事が書けるようになっていくわけです。— 私、人が言ってくれないので、自分で言うのですが、整理部を経験して、原稿がうまくなったと思います。これ、うちの女房が言っていたので信じたいのですが。先輩なんかはなかなか認めてくれないのですけれども、すくなくとも女房からは「うまくなったわね」と言われるようになりました。それから、瞬時に長い文章なども要約できるようになりました。

これ、まさにNIEですよ。我々は仕事でやっていますので、辛い思いをしながら記事を読むこともあります。でも、子供たちはそんな辛い思いをしないで、こういった能力が身につく、— そういったことが望ましいと思うのです。とにかく、新聞の記事というのは何度も叱られながら、鍛えられたプロが書いている。そういった題材です。そういったもの

を素材として取り上げて、皆さん、学校現場で使っていただければ非常に有意義だと私は思っています。

所澤 はい。

吉成 4人の石田さん、伊藤さん、宮崎さん、畑尻さん、今日は新聞記者がたくさん来ていて、みなさんのことを取材しています。たぶん、近いうちに新聞に載るでしょう。逆にあなた方も、今日のことを取材して記事にするといいですね。これから学級新聞や個人新聞を書くときに、ぜひこの様子を書いて、見出しもいいのを考えてみてください。それが今日の宿題ですね。期待しています。

所澤 では、本当に宿題になってしまいましたけれども。

今の濱吉さんのお話で、大人はたいへんだけれども、子供たちにはたいへんではないかもしれません。なぜ、我々がたいへん、— 僕の年代も吉成さんと同じだと思いますが、なぜたいへんだというかですとね、文章って、大事なことは後で書くように、なんとなく小さい頃から教わっているのですね。

新聞記事って大事なことを前に書くではないですか、だけど、実際には、これアメリカの論文のスタイルがそういうふうになっているから、ということもあるのですが、いちばん大事なことをいちばん最初に書きなさい、これは、実は、文章を書くときに、重要だということが、だんだん日本の中に浸透してきました、小学校の低学年の頃から、そういうような形で作文をします。そうなってくると、やはり我々の年代が苦労したような文章の修行とは違うような形で、子供たちは文章が書けるのではないか、というようなことを思うのですね。

さて、それで今まで、滝野川小学校の授業だとか、新聞の様子を見て、いろんな話をしてきたわけですが、ちょっと、テーマにもどして、「学力」ということを改めて考えてみたいと思いますが、学校の授業って、新聞ではなくて、通常教科書で行うということを言われています。僕も前任校は群馬大学だったので、群馬県で授業研究会があって、教育委員会の人と一緒に、現場の先生を集めて研究会をや

るときに、「先生、お願いですから、教科書を使わないってことだけは言わないでください」と頼まれる。教科書は必ず使ってほしいと。

新聞を使っていいのかというと「使って悪い」ということは書かれていないから、かまわないのですが、でも、「新聞を使うから教科書を使わない」というわけにはなかなかいかない。そういうような傾向があります。しかし、教科書で授業をするというのは、実は非常に難しいのですね。

理科の例がわかりやすいので、ちょっとそのことを言いますと、理科って実験があるじゃないですか。教科書の中に実験の答えが書いてあるのですね。答えが書いてあると、実験をやるときに、答えを知って実験をやる。そうすると、実験にならないということがあります。実験にならないというか、それに合わせて実験をしてしまう。最近、結果を書いていない教科書が少し登場しましたが、学校現場では使いにくいということで、やっぱりどうしても結果を載せてしまう。

実は、明治時代の最初の理科の国定教科書は、児童用書が発行されなかったのですね。子供に実験結果がわかってしまっただけでは、実験をやる意味がないということが理由の1つではないかと思われるのですが、明治36年に発行されたものは、教師用書しかない[それも明治42年に発行]のですが、その問題が未だにずっと解決されていない。

そういう点を考えると、新聞というのは、現在起こっていることが書いてありますから、明日、どうなるかわからない、という問題があります。つまり、先生も結果を知らないし、子供ももちろん結果を知らない。そういう中で授業が行われていく、これが実はとても、創造的というのですかね、自分たちでいろいろ考えていく、最近、流行の言葉ではアクティブラーニングに非常に向いているのではないか、というようなことを感じます。

さて、そこでですね、子供たち4人は新聞記事を授業で使ってきて、今日だけではないですね、この3年間くらい、新聞記事をしょっちゅう授業で使ってきたわけですが、授業で新聞を使うことについて

どう思ったでしょうか。畑尻くん、宮崎さん、石田さん、伊藤くんですが、4人に順番に答えてもらいます。

畑尻 とてもよい勉強法だと思います。なぜなら、例えば、戦争の学習のときに、教科書に載っていない体験談なんかあって、広く深く勉強ができると思うからです。

宮崎 今の世の中のことがわかっていいと思います。資料として使うので、今のこと、新しい情報がわかることがいいと思います。また、新聞にはいろいろなことが書いてあるので、詳しく調べられることもいいことだと思います。

石田 私は、新聞記事を授業で使うことをいいと思います。私がそう思ったのは、今、理科でやっている学習について、それを先生が紹介してくれたときです。教科書や本には、新しい内容がなかなか入って来ないけれど、新聞なら、すぐ情報が入ってくると思いました。新しい情報だと今のことを学習している気持ちになれます。

伊藤 世の中のことを知ることで、テレビのニュースとは違う目線でできごとを考えることができます。テレビのニュースではわからない言葉が、飛ばされてしまうけれども、新聞は自分の理解度に合わせて読むことができるので、深く理解できるようになりました。

所澤 4人とも、新聞で新しいことを学ぶということに価値を見いだしていると思うのですが、校長の立場で関口さんとしては、どのようにお考えなのでしょう。

関口 はい。やはり、教科書の限界を感じます。教科書には学び方がきちんと書いてありますし、何を学ぶかということが、明確になっています。ですから、教科書を学ばせることで、きちんとした狙いにあった学習ができるのだと思うのですが、教科書でどうしても追いつかないなというところが、社会科などの新しいデータという点で課題を感じています。それから、新しい情報ですね。そういうものがどうしても、教科書を補足する資料として必要ではないかなと思ったのですけれども。

それから、例えば、本をつかったり、インターネットを使ったりというようなことも、今、よく行われていますけれど、インターネットの情報でも、新聞から発信された情報ということであれば、それなりに信頼性があるのかもしれませんが、クリックしていくに従って、どちらかという、確かでない情報が入ってしまう可能性がかなりあるのかなと思いました。そういう意味で、新しくて確かな情報を取り入れるという意味では、新聞に価値があると思います。

さらに、今の子供たちの発言の中にもありましたけれど、リアリティがないと、なかなか自分が学んでいることが今の社会と結びついているということが感じられない。しかし、リアリティがあれば、学ぶ意味が出てくるのかなと思いますので、やはり、できる限り、学習で学んでいることと、今の社会が繋がっているということ、意識させることが、おもしろく学ぶ一つの手立てになるのかなと思います。

さらに、その延長として、今、18歳選挙権などもありますけれど、自分たちの今生きているところが、新聞をひとつの窓口にして、社会と繋がっているのだという意識を持たせることがとても大事なのではないかと思います。少し大げさですけれども、社会参画意識を身に付けさせる意味でも、小学校の頃から新聞と触れることが大切なことなのかなと思います。

その点で、新聞は教科書の効果をいっそう高めるいい資料になるのではないかなというふうに考えています。

所澤 はい、今の校長としての考え方ですが、どうですかね、結果がわからないということについて。例えばですね、東京オリンピックの決まるか、決まる前、いっぱい予想記事が出ていて、結果的に東京オリンピックになるのですが、そういうときにNIEをやっていると、多分、子供たちはいろいろ予想したりして面白いのではないかなと思うのですが、それは校長としていかがですか。

関口 予定のないことを言われると困るのですけれども（会場 爆笑）、だから新聞っておもしろいのだと思います。例えば、予想したとして、予想が外れ

たことが、別に、外れではない。それなりに1人1人が根拠を持って、その予想ができていれば「みんな正解」ということになるのだと思います。そういう意味では思考力を高めることにもなりますし、その根拠を探すときに、どうやって、いろんな資料からもとめていくかという、一つの大きな拠り所が新聞になるのだと思います。答えになっていないかもしれませんが、根拠を持つという意味で新聞はとても大切なものだと思います。

所澤 今のような点について、吉成さん、どう思われるでしょうか。今のような新聞の効用という点ですが。

吉成 私は今、関口さんが言った「社会とつながっていく」というのは、ひとつの大きなキーワードだろうと思います。括弧つきでない学力は、そこにいちばんのキーポイントがあるのではないのでしょうか。

ちょっとスライドを見てください（次頁）。

今、学習指導要領の改訂作業が進んでいて、中教審（中央教育審議会）の各部会の資料がいろいろ出ているのですが、これは教育課程企画特別委員会というところの資料です。文科省のWebページで見ることができます。たくさんの提示資料の中で私が特に注目したのは、この部分です。これは、2030年に向けた教育のあり方に関する第2回OECD政策対話——OECD側と日本の担当者とは政策対話をした、そのまとめのような資料なのでしょう。OECDの「education2030事業」と記されています。

これからの時代に必要なCompetency、基本的な能力として3つの分野を挙げています。KnowledgeとSkillとCharacter。日本語訳で言えば、Knowledgeは知識・理解ですね。Skillは応用・活用ということになると思うのですが、問題はこのCharacterですね。今まで、関心・意欲・態度と言っていたものでしょう。これを文科省では、「人間性」と訳しています。その中の個別の能力として例示されているのは、Mindfulness「おもしろい」、Curiosity「興味関心」、Courage「勇気」、Resilienceは「跳ね返す力」、「逆境を跳ね返す力」というふうに訳しているようです。Ethicsは「倫理観」、Leadershipは「リーダーシップ」

と、そういうようなことを「人間性」の中身として示しています。

OECDによると、次のPISAか、次の次のPISAくらいで、この第3の学力のCharacterについても、何らかの、試験問題を——これをどう試験問題にするか難しいと思うのですが、何らかの方法で測ろうと試みようとしているようです。

測定したり、点数化しづらい能力だと思いますが、必要なことは分かります。そして、このような力を育てていく上で、NIEが有効であることは強調できることではないかと思います。

個人が社会とどう関わっていくか。社会的な存在として、社会に主体的に働きかけ、自分の人生を豊かにしていく。文科省が、この3分野の真ん中にアクティブラーニングを入れている意図も、そういうところにあるように思われます。日本の教育の弱点であり課題でもあると思いますが、ここにNIEの出番があると言えるでしょう。

所澤 この点について、濱吉さんの方で一言、言っていたらとありがたいです。

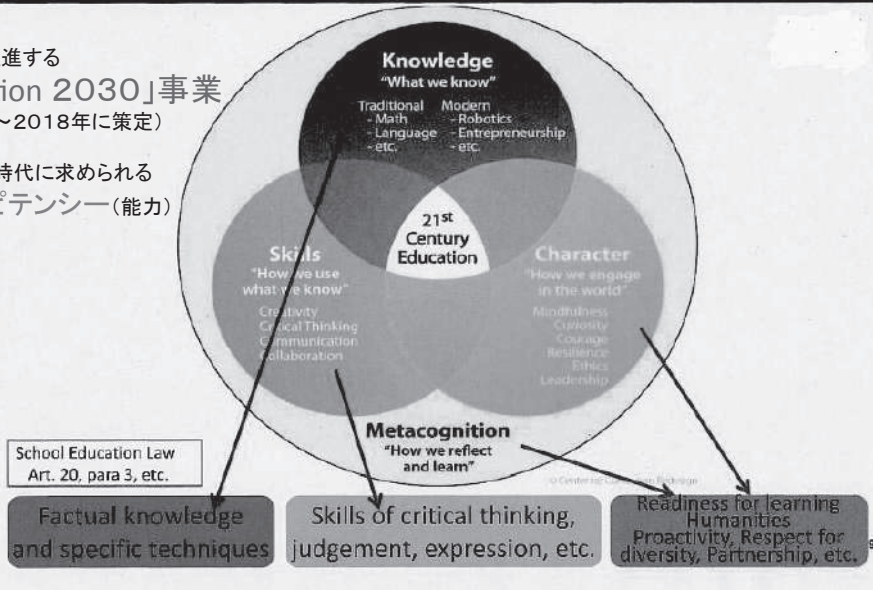
濱吉 そうですね、Characterについて一言申し上げます。新聞記者の仕事というのは、今、吉成さんがお話しされたような能力の凝縮されたようなものだと思います。先ほどの、逆三角形の記事の書き方と同じなのですが、記者になっても最初からできるわけじゃないのです。新聞社に入りますと、まず、地方の支局に派遣されて、だいたい、2カ所か3カ所、5、6年、地方。それも夕刊、朝刊と夕刊が両方あるところ、あとは、朝刊だけしかないところ、両方経験させられます。警察まわり、小さな交通事故の記事——最初はだいたい5、6回ボツになります。昔は紙に書いていました、原稿用紙に。先輩が見て、パッとゴミ箱に捨てるんですね。今だったらすごい人権侵害だと思うのですが、もう、そんなの当たり前でした。

そうやって何が悪いのだろうかとか、いろんなことを経験して学んでいくのですが、警察まわりと並行して高校野球の取材が始まります。新人の記者になぜ高校野球をやらせるかという、写真も全

Overlap between the concept of Curriculum Redesign and "Three Elements of Competency"

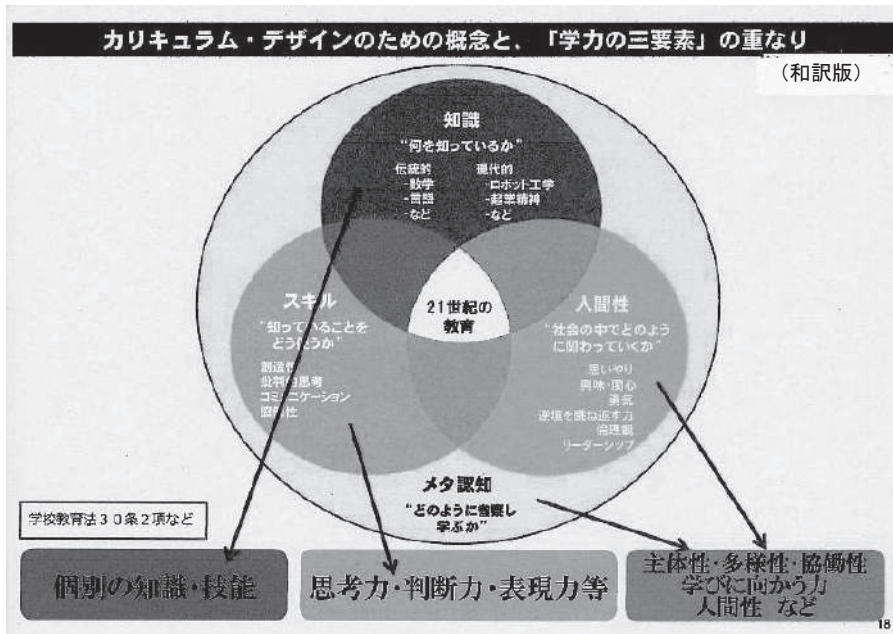
OECDの推進する
「Education 2030」事業
(2015~2018年に策定)

これからの時代に求められる
コンピテンシー(能力)

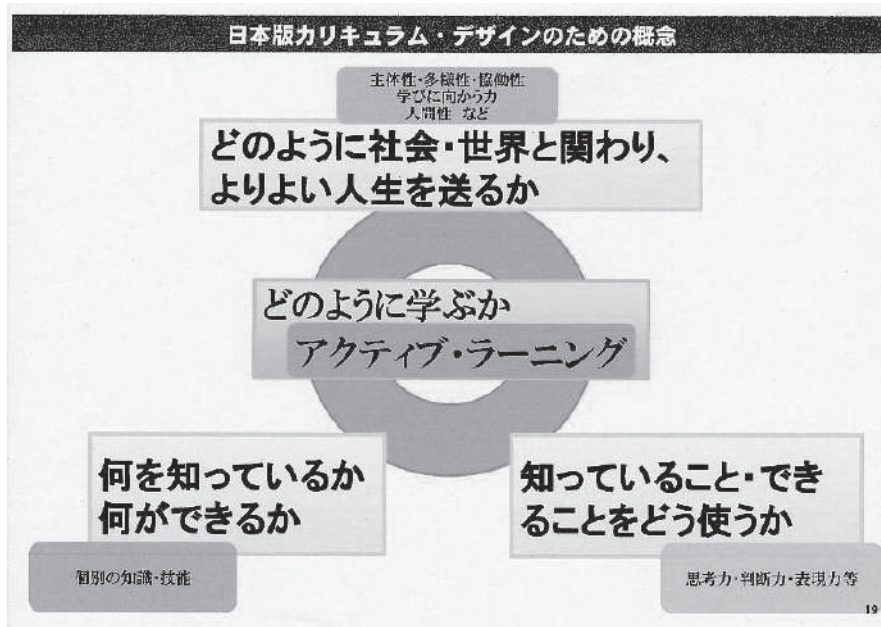


カリキュラム・デザインのための概念と、「学力の三要素」の重なり

(和訳版)



日本版カリキュラム・デザインのための概念



部自分で撮って現像して焼き付ける — 昔は印画紙でしたね。だから、現像も焼き付けも全部できます。よく現像液をネクタイにこぼして、穴が開いたことがあるのですけれども、写真もうまくなる。それから、短時間で安打数、失策とか、投手成績とか全部計算して出さなければいけない。それで、さらに観客席の雑感、インタビューもする。そういったことを短時間でこなしていく、そうやって能力がどんどん身についていくのですね。

高校野球、警察が終わると、今度は県警本部、— 警察、各県にある県警本部の担当になります。毎晩、刑事さんの家に行く、そして、コミュニケーションはかかっていく。

そのあとは、市役所の担当になることが多いです。市役所と教育というのは、だいたいセットになっておりまして、市役所の行政のことを勉強したり、教育のことを勉強したり、取材したりして、そのあと、県庁の行政 — 都道府県全体の行政や予算ですね、それをやる。

そのあと、選挙をやって、遊軍と言いまして、自分のテーマを持って書く、そういった役回りをして、だいたい一通り終わって、6年か7年経つと、東京とか、大阪の本社に上がってくる。

その中で、このキャラクターと言われている能力がどんどん身についていくというふうに思っています。

先ほど言いましたけれども、人の話を聞いたり、核心をついたり、その人物に肉薄して、本当に最後は、要するに人の話なのです。通常の取材では文献を読んだだけで記事を書くことはほとんどないです。誰かから生の声を聞いてそれを文字にする。それが真実であるというふうに裏付けを取って確信してから記事にする、それが、新聞記者の仕事なのです。今言われたキャラクターみたいなものは、実はどの商売にも必要な要素だと思うのですが、その中でも新聞記者はわかりやすい、— こういった能力が必要だと、わかりやすい典型的な職業の例だと思います。以上です。

所澤 どうもありがとうございます。今、キャラクター

という言葉が能力の中に出て来てしまったので、何か、キャラクターはいいものとわるいものがあるとか、進化するとかそういうふうに理解する方もいる方もいるかもしれないのですが、それはちょっと間違っていると思うのですね。そういうものではなくて、キャラクターっていろいろあるのだから、生き方もいろいろあって、そういう中で、どうやって生きていくかが能力だということです。さて、その点ちょっとご注意ください。と思います。

さて、子供たちに最後の質問なのですが、NIEを学んで、新聞、社会の見方について、変わったなと思えるようなことが、あるでしょうか。また、やってみたいNIEがあったら聞かせてください。

まず、変わったなと思うことを、畑尻くん、石田さん、伊藤さん、宮崎さんですね、順番にお願いします。

畑尻 一つは、書く力や読む力の成長です。文章を書くときに、書きたいことがはやく頭に浮かんで来て、それをはっきり文章で表現できるようになりました。また、使う言葉の種類も増えました。新聞を読んで出て来た漢字や熟語の意味が文の前後の内容から、だんだんとわかるようになり、使えるようになってきました。二つは、前は事件などに対して、ただ、ひどいと思わなかったけれど、今は、一般の人を巻き込むからひどい、いろいろな考え方はあると思うが、人を傷つけるのはよくないなど、詳しい部分まで、考えるようになりました。

石田 今までは新聞を見るとしても、芸能などの自分の興味のあるものだけを読んでいただけで、NIEをだんだんやっていって、社会的なことについて、興味をもてるようになりました。今まではなんとなくテレビを見ていて、たいへんだとか、他人事(ひとごと)のように感じていたことも、新聞を読み、考えていくうちに、自分のこととして感じられるようになりました。大人の会話でわからないことが、昔あったけれど、今は理解することができるようになり、話が弾めます(ママ)。大人の意見と子供の意見の考え方の違いがわかってきました。前はなかなか伝えにくかったことも、今では新聞を読んでいるので、

少し難しいことでも自分の意見をはっきり伝えられるようになりました。

伊藤 目で見たり、頭の中で考えたりしたことをどうしたら相手に伝わる文章になるのか、工夫することが楽しくなり、作文が得意になりました。小学生新聞に応募したら、僕の作文が選ばれて新聞に載ったり、子供記者や、子供審査員で選ばれたりして、今までにない体験ができました。また、授業で同じ出来事について、いくつかの新聞を読み比べたら、文章や写真によって、こんなことも印象が違うのかと驚きました。一つの新聞だけでなく、いくつかの新聞を読むことで、違う角度から考えてみるができるようになったと思います。

宮崎 まず、成長したと思うところは、作文とか、新聞など文章を書くものが速く書けるようになり、書く力がついたと思います。それから、私は世界で起こった事件を遠い国のことだからと思って別に特別な思いはありませんでした。けれど、NIEをはじめから、たいへんなことが起こってしまって怖いな、日本で起こったらどうしよう自分のことのように思うようになりました。

所澤 はい、それでは次に、これからやってみたいNIEを聞かせて下さい。

畑尻 僕はスクラップにした記事などで、クイズを出したい。今の出来事を教えられるとおもしろいと思います。

石田 私は、大人の新聞から自分の好きな記事を選び、まず、それを切り取ってそのほかの新聞から関連する記事を選んで読み、どの意見に賛成か、反対かということを書くことです。そうすると、本当に正しいことがわかってくると思います。

伊藤 小学生向けの楽しいだけの新聞ではなくて、世界で起きていること、起きている多くの出来事を知ることのできる大人向けの新聞と同じような記事や情報のつまった大人から子供まで、誰にでもわかりやすい新聞をつくってみたいです。

宮崎 英語の新聞もスクラップしたいです。なぜなら、学校の英語活動が楽しいからです。また、英字新聞を、英語の辞典で調べながら読むと、英語が少

しずつわかるようになってくるからです。

所澤 はい、どうもありがとうございます。今の4人の話を聞いていて、全部キャラクターが違うのですよね。そのキャラクターの違いに対して、新聞が、全部対応ができるというところが、実はNIEのすごさかなということ、今、4人の話を聞いて感じました。

さて実は、今、外が暗くなってきていますので、ここで、一足早く子供たち4人は退席します。がんばりましたね。(会場 拍手・子供たち退席)

さて、終わりの時間が近づいてまいりました。言い足りないことはいっぱいあると思うのですが、最後にお一人3分程度で、「学力を超えるNIE」について、自分の感じた結論ですね。お聞かせ頂けたらと思います。まず、関口さん。

関口 6年生に質問したことをちょっとお伝えします。「NIEの授業について思ったことは？」今の4人の子とは別の子が書いていることをいくつか紹介します。

「新聞記事は文字だけではなく、グラフや地図などを貼り付けてある記事があり、もっとも伝えたいことがわかりやすい。」

「世の中のことについて、自分の意見を持つことができ、友達と話し合って友達の考えのよさに気づくことができた」

「同じ記事を読んでもいろいろな考え方がありますが、わかった。どの考えにもなるほどな、という理由があった。」

「新聞記事で驚いたことがあると、家族で話すことが多くなった。世の中のことについて、自分の意見を持つことができ、友達と話し合って、友達の考えのよさに気づくことができた。同じ記事を読んでもいろいろな考え方があった。」

そして「NIEタイムを続けて変わったことや思ったことは？」ということで、「一面だけしか読まなかったけれども、NIEタイムを通じて、新聞はおもしろいものだと気づきました。今は新聞を広げ、頁をめくって読んでいます。」生意気な子供ですね。(会場 笑い)

「興味のある新聞記事を探す間に、自分がまった

く興味がなかったニュースや知らなかったことを見つけてることができるので、楽しい。」新聞ってそうなのですね。新聞の特徴である一覧性で、まわりの記事に発見がある。それを子供のときから気づいたということはすごいと思います。

「朝の頭の体操だと思っている」と。

「テレビでわからないことが載っていて、今の日本をたくさん知ることができる。」

「戦争についての記事はすべて読み、要約するときに、戦争についての政府の考え方などの社会のことを多く知ることができて、役立っている。」

「僕の家では新聞を取っていないので、週に一度のNIEタイムを大切にしている」という子供もいます。

「初めの頃は、えー、NIEタイムか、と思っていたが、今はよっしゃあ、今日はNIEタイムだと思うようになった。」と。「よくわからない文ですけども、何となくよくわかります」(会場 笑い)。というような、子供の感想を見ていると、なにやら括弧づきの「学力」とは違う学力、広い意味での学力というのを子供たち身につけていってくれたのかなとそんなふうに感じます。

所澤 はい、それでは、続いて濱吉さんお願いします。

濱吉 私はここ数年ですね、世の中が非常に難しい問題がいっぱい出て来て、例えば、安保法制とか、新国立競技場の問題とかギリシャの負債の話とか、イスラム国の話とかですね。毎日、ウォッチしていかないと、よくわからない出来事って最近増えたと思いませんか。私は、本当にそう思っています。それで、新聞を読んでもよくわからない、実は。

では、他にいい手段があるかということ、やっぱり新聞なのですね。新聞は先ほど申し上げましたが、生もの、一日の中いっぱい形を変えてきます。それで、最終版が出ればおしまいなのだけれど、次の日も、新しい新聞が出ます。ですから、情報は積み重なっていくわけです。ずっと、連続性がある。それを毎日丹念に読んでいくことによって、いろんなことが、見えてくるのかなと思っています。

先日、新聞協会主催のNIEのフォーラムが開かれ

ましたが、そのときに、ユニクロで知られているファーストリテイリング社の執行役員の方が各店長さんに新聞を読ませているという話を聞きました。なぜかというところ今の新入社員 — 大学生、新入社員はまず、文章も書けない、それから、世の中の基礎知識がない。これはたいへんだということで、社員教育にたいへん力を入れているところです。

うちの息子30歳なのでですけども、息子の世代を見て同じ事を思います。このまま世の中どうなっちゃうのかなと。

そのための、一つの解決の手段としては、やはり、こういったNIEが重要だと言うことです。ちょっとずつでいいですから、先ほど、子供たちが言っていましたけど、「最初はいやだったけれど、何か楽しくなった」と。それなのですよ、だから。続けていくこと、いちばん大事だと思います。そして、新聞社というと、皆さん敷居が高いように思われる方がいるのですが、そんなことはありません、どんどん電話をして無理難題を言ってください。できる限り協力しますので、どうぞよろしくお願ひします。

所澤 はい、先ほどから、新聞社を是非困らせてほしいというご希望です。はい、吉成さんお願いします。

吉成 先ほどの研究発表の中で、問題解決型の学習過程には「つかむ」「予想する」「調べる」「学び合う」「まとめる」という5つの過程があると示されましたね。私は、その中で、NIEの関係で言えば、いちばん重要なのは、最初の「つかむ」、問題を見出す、問題をつかむ力が重要だと思っています。

また、今後の課題として2つの項目が示されました。私はそれに加えて、もう一つの課題というか、希望を述べたいと思います。

それはこういうことです。滝野川小はこんなすごい実践をして、これだけの成果をあげてきました。教材開発の成果はあるし、それが教材開発一覧に結実しています。問題はこれからですね。これからの継続と発展です。日本中を見ても、先進的な実践をしていた学校が、例えば中心になったメンバーや推進役になった人が異動するとか退職するとかして、数年すると、火が消えたようになってしまう。積木

崩しのようなことの繰り返しでは、日本全体のNIEが発展しないと思います。滝小だけではなく、日本全体の問題として、継続・発展のための方策を考えたいものだと思います。

私が提案したいことはこうです。今日、研究冊子をいただきましたね。あれ、ぎっしり内容が詰まっていますけれども、こういう研究冊子って、資料室に置いてあっても、次に来た人はまず、見ないですね。室の持ち腐れになりがちです。それを改善するため、単元の「パッケージ化」を提案したいと思います。例えば、ある教科のある単元について、大きな袋を用意する。その中に実践したことの過程と成果を全部入れるのです。指導案、教材、資料、ワークシート、使った新聞記事、授業記録、子供の作品や感想、実践者の反省や改善点、研究協議会の記録、講師や管理職のコメント、申し送り事項などです。次に同じ学年を持った人にとって具体的に役に立つ形で残していきます。このパッケージの中身は、毎年更新し、よりよいものに改善していく。それを何年か続ければ、ほとんどの単元を網羅できるようになるでしょう。これがあれば、新任教師でも異動したての先生でも、NIEの教材開発をゼロからやらないですみます。

この作業は、アナログでもできますが、これからはぜひデジタル化したいと思います。広島県の実田西小学校というところが、先進的な取り組みをしています。1枚の、プリントすればA3判の大きさになる画面に、各学年の全ての教科・領域のカリキュラムが一覧できるようになっていて、その中の例えば「日本の農業」という項目をクリックすれば、先ほど挙げたような記録が出てきます。収録資料は重層化して収めてありますので、必要な内容を容易に取り出すことができます。

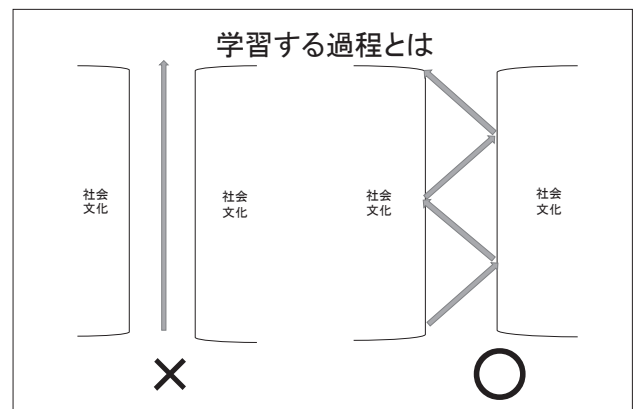
私はこれを単元の「パッケージ化」とか「ユニット化」と呼んでいるのですが、そういう単元パッケージが蓄積されていけば、先ほど言った、実践者が異動したり、辞めたりしても、成果を継承できるのではないかなと思います。おそらく来年は、滝野川小の研究主題は、NIEではなくなるでしょう。もちろん理科でも体育でもよいのですが、ベースにNIEの日

常化や新聞の活用が残ってほしい、それが私の希望です。

所澤 はい、それではですね、私の方から簡単なまとめをさせていただきたいと思います。

今の吉成先生が「今年で終わる、来年は違うテーマ」というふうにおっしゃっていましたが、私としては来年も同じテーマで突っ走ってほしいというふうに思っています。

それはそれとしてですね。今日の話は、濱吉さんに来て頂いた関係もあって、新聞記者からの視点、あるいは、新聞を読むということが多かったのですが、今年の一年間の実践で私が非常に感動した例が一つあります。それは先ほど研究発表の時に、完全変態の話があって、蝶が幼虫、卵から幼虫になってという話があったのですが、あのクラス（3年生）は、観察新聞というのを作っていました。そのときに、子供たちがテストで全部正解になったことが紹介されていましたが、それには理由があって、— その次にヤゴをやったのです。ヤゴも、やはり変態していくわけです。そうすると、ヤゴの場合はさなぎがないのですよね。毎日、変態する度に新聞をつくって行って、そして、号数が違ってしまったのです。それで、さなぎがなくて、ヤゴはトンボになると。そういうその違いがはっきりわかったわけです。ですから、新聞教育、新聞をつかったNIEって別に、新聞社から来たものを見るだけではなくて、自分たちで作っていく新聞の中で、そういう発見もできると。そういうようなことを学ぶ場でもあるということです。



この図で、何を描いたかということなのですが、

この図はですね、実は、学習するプロセスなのですが、昔よく思われていたのは、社会との、社会文化の中で学習するときというのは、社会からあまり影響を受けないでまっすぐ勉強をしていって、ドリルだとか、教科書を勉強していった方が、学力がつくというふうに思われていたと思うのですが、左側の図です。しかし、これは1960年代くらいからでしょうか、学問的にもこれは違うと、現実には人の学力、能力というのは社会と衝突しながらできあがっていく、一つ一つの出来事との出会いででき上がっていく。右側の図です。

例えば、今のことも、トンボの話、トンボとそれから、モンシロチョウの幼虫を見ていて、そして、それを見ていて違いに気がついて、学んでいくわけですね。本に載っていることで学ぶのではない。そういうような学習なのだと。つまり、ジグザグにいろんなところと出会って学んで行く。NIEってそういう力があるのだと思います。NIEでなくてもできるかもしれませんが、しかし、NIEの中でそれが達成できた、私はすごいなというふうに思います。

それで、余談ですが、先ほどの話について付け加えるとですね、そのあと、そのクラスで毛虫の出てくるビデオを見たのですよね。蝶の幼虫だったか、蛾の幼虫だったかちょっと覚えていないのですが、たぶん蝶の幼虫だったと思いますが、それを見てですね、小学校3年生のクラスの半数を占めている女の子たちが、なんと言ったか、「かわいいー」と言ったのです。毛虫を見て「かわいいー」。そういうふうに、毎日観察して、育っていくところを見ると、毛虫がかわいく見えるようになる。これはすごいなと思いました。

「学力」を超えるNIEということなのですが、そういう学力ですね、例えば、毛虫を見てかわいいと思うのは、括弧付きの「学力」では評価できないけれども、括弧のない我々の思っている学力で、やっぱり学力なのではないのか、そういうようなことを感じます。この図で言うとはですね、学校がNIEでがんばっているときというのは、このジグザグの密度が非常に高くなっていくということではないか。この3年間

の滝野川小学校の実践は、この密度をものすごく高くして折れ線の数をうんと増やしていった実践であったのではないかというようなことを感じます。

私としては来年テーマが変わったからと、—テーマを変えてまた違うことというのではなくて、なんとかしてですね、このまま続けて突っ走ってほしいなと。ここで、関口先生の30年以上のこのNIEの実践なのですが、僕は先ほど打合せの際に、「集大成だというふうに言おうと思う」と話したら、皆さんから「いや、集大成だと今年で終わりになるから、ダメだ」というふうに叱られた。「これは集大成ではなくて、一つの過程で次の段階に是非行ってほしい」と。

これは、今年4月からずっと関わってきた私の気持ちでもあります。それでは、私の方で先に述べてしまいましたが、何かありますか、どうぞ。

吉成 すみません、最後に一つ、不規則発言をさせていただきます。今日はせっかく北区の教育長さんがいらっしゃるので、お願いがあります。

それは、全国各地に仮称「スーパー NIEスクール」をつくりたいということです。高校には「スーパーサイエンススクール」とか、「スーパーグローバルスクール」ってありますが、そのNIE版、日本語で言えば「新聞活用教育拠点校」です。そこでは、年間を通して新聞活用の授業がある、NIEの研究もする、各種の資料も保管・整備されている、もちろん各種の新聞、地方紙や英字新聞なども利用しやすい形で置いてある、NIEに堪能な教師がいて、講師として派遣できる、内外からの相談にもものる、年1回は公開授業、数年に一度は全国的な研究発表会を開きます。このような拠点となる学校を教育委員会と学校とが連携し、5年から10年くらいのスパンで契約を結ぶ。もちろん、新聞界も全面的にバックアップする。そういう学校が全都道府県に1校ずつでもできればいいなと思うのです。

そのトップを、「新聞大好きプロジェクト」の北区のどこか、あえて滝野川小学校と言いませんが、北区にそういうモデル校ができれば、日本中、いや世界中に発信できると思います。各国から日本の教育に視察に来ますけれども、NIEでしたら、北区へ行く、

北区へ行けばいちばん先端のNIEが見られる、そういうようなところになってもらおうとすばらしいなと思うのです。これが私の夢です。

所澤 実は、我々4人の夢を代弁していただいたと勝手に私は思っていますが、最後に、是非、これから、濱吉さんが困って、「こんなに新聞社に頼まないでくれ」と、濱吉さんに言われるような形になることを私は期待しています。それでは、これで、シンポジウムを終わりにしたいと思います。どうもありがとうございました。

(会場 拍手)

総司会 ご来賓の皆様がご退場されます。今しばらくそのままお待ち下さい。

(終了)

(註)

- (1) 『平成26年度 研究紀要 自ら問題を見付け、ともに学び合って解決する児童の育成～NIEの日常化と教材開発を通して～』(全75頁)、及び『平成26・27年度 北区教育委員会研究協力校 自ら問題を見付け、共に学び合って解決する児童の育成～NIEの日常化と教材開発を通して～』(全78頁)
 - (2) 近年、教師の役割は教えることではなく「支援」することだといわれることが多い、同様の表現として「支え手」や「伴走者」が使われる。秋田喜代美・佐藤学編『新しい時代の教職入門』(2006年)では、教師は「伝達者」ではなく、未知の展開への「支え手」だとしている(p.27)。1997年12月6日のNHKのテレビ番組「メディアと教育」では、現・はこだて未来大学教授の美馬のゆり氏が、教師とは「教える存在」ではなく「伴走者」であると語った。「支援」という語は、1989年の学習指導要領改訂で学力観の転換とともに頻繁に使われるようになった。そうした点について、筆者は「『支援』とは、子供に自ら考えさせること!!」(『逆転』Vol. 54 No.11, 社会科勉強会、p.1, 2014年3月8日)に整理している。
 - (3) 所澤潤・岩上薫・吉成 勝好・赤池幹・関口修司「教室の壁を取り払うNIE－東京都北区立王子第三小学校NIEシンポジウム2009の記録－」『群馬大学教育実践研究』第28号、2011年3月、pp.227-240
- 所澤潤・石田成人・関口修司・吉成勝好・渡邊祐希「授業改善のためのNIE－群馬県板倉北町立北小学校NIEシンポジウム2010の記録－」『群馬大学教育実践研究』第29号、2012年3月、pp.141-161
- 所澤潤・赤池幹・飯塚利夫・石田成人「授業改善のためのNIE(社会科と家庭科を中心に)－群馬県邑楽郡板倉町立北小学校NIEシンポジウム2011の記録－」『未来の保育と教育－東京未来大学保育・教職センター紀要－』第2号、2015年3月、pp.69-87

(しょざわ じゅん)

東京未来大学こども心理学部

(せきぐち しゅうじ)

一般社団法人日本新聞協会NIEコーディネーター

(はまよし まさずみ)

前朝日新聞社NIE事務局長

(よしなり かつよし)

新聞教育支援センター代表